

冬の白神岳 (令和6年2月6日撮影)



【発行】林野庁 東北森林管理局

住所：青森県西津軽郡鰺ヶ沢町大字舞戸町字東阿部野 70-82

津軽白神森林生態系保全センター

TEL：0173(72)2931

## 鰺ヶ沢高校の生徒さんと一緒にフィールドで活動！（後編）

先月号に引き続き、青森県立鰺ヶ沢高校野外活動部の生徒さんと当センターとの2日間にわたる活動について紹介したいと思います。

2日目、1月9日はまずフィールドでの作業後（1月号参照）、以下に紹介する西目屋村内の各施設を見学。これまでのフィールドでの活動を、より立体的に理解してもらうのが狙いです。

まず、ジビエ工房白神です。ここでは主に鳥獣被害対策で捕獲されたツキノワグマが、食肉として加工されています。その冷凍庫には多くの肉や手等が保管、その生々しさに言葉を詰まらせていましたが、私たち人間は、クマに限らず、日々多くの命をいただきながら生きている存在です。その現実直面し、何かしら感じることも、とても大切な体験ではないでしょうか。



ジビエ工場にて

環境省西目屋自然保護官事務所では、白神山地核心地域で実施しているモニタリング調査について話を伺い、大いに興味を抱いたようです。ただ、この作業は現地での野営が必要。まずは野外活動部の活動でさらなる経験を積んでからですね（笑）

最後の白神山地ビジターセンターでは、ビジターセンター職員の方から、様々な展示物を用いて、白神山地について説明をいただきました。よほど興味がわいたのか、1時間の予定が、なんと2時間半も滞在することに！



展示ホールにて

2日間にわたって若い高校生と行動を共にしたことで、私たちもはるか昔の（笑）初心を思い出しました。今後もこのような機会を設け、一緒に白神山地の情報を発信していけたらと思います。

最後に、急なお願いにもかかわらず、今回の活動にご協力いただいた関係機関の皆さんに、改めてお礼申し上げます。ありがとうございました。（赤澤）

## 白神山地世界自然遺産登録30周年記念シンポジウム

### —白神の豊かな自然を次世代につなぐ—

白神山地が世界自然遺産に登録されて30周年を迎えたことを記念したシンポジウムが、1月20日（土）、弘前市の弘前文化センターで関係者や一般客ら380人が参加して開催しました。当日は、深浦町十二湖の透き通った群青色で知られる「青池」を交流サイトで見ただけで、白神山地に興味を抱き今回の出席となった俳優の志田未来さんや、マタギ文化を伝える地元西目屋村の工藤茂樹さんら4名が、パネルディスカッションを行い、白神山地の魅力や発信方法等について語り合いました。

このほかに、西目屋小学校の児童が、暗門の滝を描くために旅をした幕末の絵師、平尾魯仙を主人公にして、白神の四季や動物たちの営みなどの創作劇を披露しました。

最後に、小谷副知事と弘前市、鱒ヶ沢町、深浦町、西目屋村の首長ら5人が「白神山地の世界自然遺産登録30周年を記念して手を取り合い保全と活用に努めていく」ことを宣言し、当センターも白神の豊かな自然を次の世代につないでいくことを改めて決意しました。（高木）



写真パネル展示とVR体験

### コラム：イノシシ目撃の新聞記事を読んで

少し前に読んだ新聞で、八戸市において今年度は113頭（11月末時点）ものイノシシ目撃があったという記事を目にしました。同記事によれば、令和元年度まで目撃情報はなく、昨年度も16頭ですので、今年度の急増ぶりに驚かされます。

実は八戸市にはイノシシにまつわる凄惨な歴史があるのです。江戸時代まで、この地方には多くのイノシシが生息していました。特に寛延2年（1749）には、多くの農作物を食い荒す、猪飢饉（いのししけかち）と言われる飢饉を引き起こし、当時の八戸藩では（人口は約6～7万人）、約3,000人もの領民が餓死する被害が生じたそうです。

この白神山地でも、八戸市と同様、少し前までイノシシの目撃例は聞きませんでした。しかし、白神山地周辺地域で実施している自動撮影カメラの調査において、令和2年度に無かったイノシシの報告が、令和3年度、令和4年度と続いて上がってきており、確実に増えてきていることを実感しています。

この令和の時代に、イノシシの増加による飢饉が起こることは無いと思いますが、農家の方たちが大切に育てた農作物に、大きな被害が生じることは間違いありません。近年懸念されているニホンジカだけでなく、イノシシについても監視し関係機関との情報共有をしていかななくては、その思いを新たにしました。（赤澤）



冬季も活動するイノシシ  
（令和5年2月深浦町内）